

日本の幼年童話 30

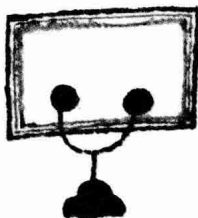
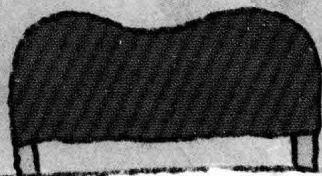
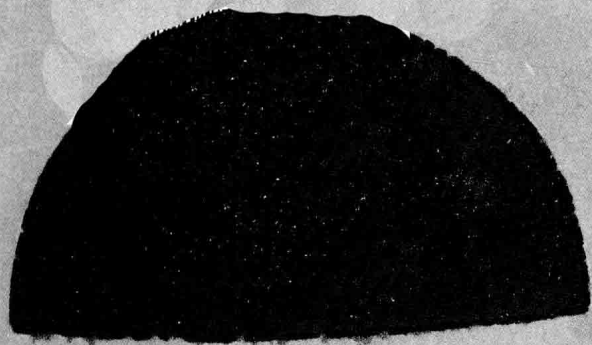
とらのかわのスカート

筒井敬介・作

渡辺三郎・絵



岩崎書店



日本の幼年童話30

とらのかわのスカート

筒井敬介・作

岩崎書店 1977

109P 21 cm / **NDC 913**

日本の幼年童話30

とらのかわのスカート

1977年3月10日発行

著者／筒井敬介

発行者／森山甲雄

発行所／岩崎書店

東京都文京区水道 1-9-2 〒112

電話 03・812・9131

振替 東京 7-96822

活版印刷／第一印刷株式会社

オフセット印刷／清水印刷紙工株式会社

製本／株式会社 小高製本

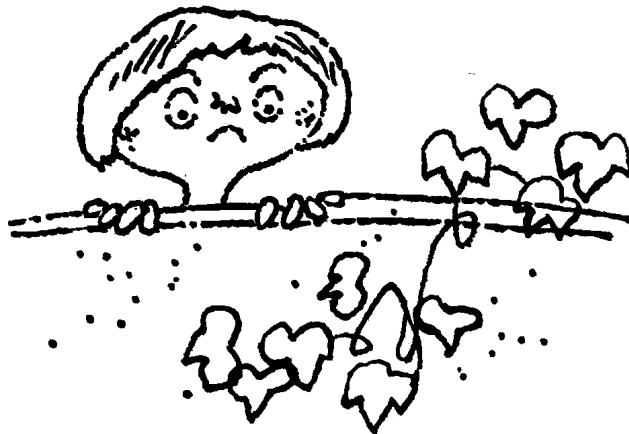
© Keisuke Tutui, 1977

(分)8393(製)513077(出)0360

筒井敬介^{つつい けいすけ}・作^{さく}
渡辺三郎^{わたなべ さぶろう}・絵^え

とらのかわのスカート

日本の幼年童話^{にっぽん ようねんどうわ}30
岩崎書店^{いわさき しやてん}



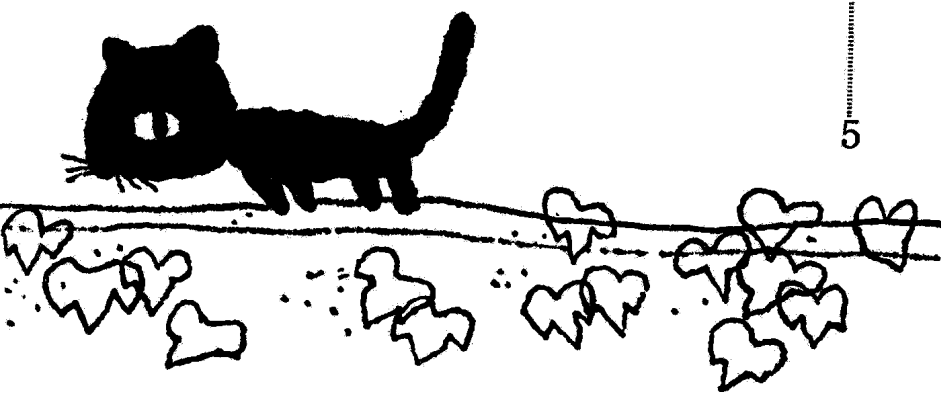
おいし、トラカツをたべるまで……………5

とらのかわのスカート……………13

一人と一ぴきのふしぎ……………25

きょうから大すき……………39

ああ、いそがしい日曜日……………59



おとうさんのくるま……………83

解説^{かいせつ}作家^{さつか}と作品^{さくひん}について……関英雄^{せきひでお}

装幀^{さうざん}宮川源太郎

表紙・口絵・さし絵^{さしえ}渡辺三郎



読者のみなさんへ

このシリーズ『日本の幼年童話』は、日本の近代、現代の創作童話のなかから、小学校初級～中級程度の読者を対象に、現代の子どもたちの興味をひき、児童文学として朽ちない生命をもつ作品を精選して、おもに作家別に編集したシリーズです。

幼年童話という形式や枠にとらわれず、作品の質を第一に、広い範囲から自由な作品選択をおこなったところに、このシリーズの特色があります。父母・教師のかたたちにも、あわせてご愛読をえられれば幸いです。

編集委員

菅 忠道／関 英雄

筒井敬介（つつい・けいすけ）

1918年、東京生まれ。慶応大学経済学部中退。

『かちかち山のすぐそばで』で73年度サンケイ児童出版文化賞大賞、74年度国際アンデルセン賞国内賞。劇作では、51年度芸術祭脚本個人賞、72年度斎田喬戯曲賞などをうける。児童文学書に、『じんじろべえ』『おしくらまんじゅう』『ちゃんめら子平次』『コルプス先生汽車へのる』『べえくん』など多数ある。

本名、小西理夫

おいしいトラカツを
たべるまで



ウサピョン学校の、給食のおばさんは、とても頭がいいのです。
いよいよあしたから、一年生の給食がはじまる日のこと。

おばさんは、

「よし、よし。いちばんおいしいのを、たべさせなきゃね」

ひとりごとをいいながら、大きなバケツをさげて、トラマン山へのぼっていきます。

ずいぶんのぼったところで、そろそろ、ゆうがたになります。

くらくなると、トラマン山はあぶないのです。なにしろ、大きなトラがすんでいて、おばさんをたべるかもしれません。

「さてと、このわかれみちの、こっちがわには、ボイルド・ピーマンをおこうね」

ざ、ざ、ざ、ざ……。

おばさんは、バケツから、あああおしたボイルド・ピーマンをだして、おきます。

そして、トラマン山^{やま}をおりはじめます。しばらくおりてから、

「あ、このわかれみちを、あっちへいかしては、だめだめ」

そういいながら、バケツから、こんどは、ニンジン・アンド・チクワソティーをだして、むこうがわのみちのまん中^{なか}へ、おきます。ざ、ざ、ざ、ざ、ざ……。

——お婆さんは、なにをかんがえているのでしょうかねえ。

また、しばらくおりると、もうそこはトラマン山^{やま}のふもとで、みちもあっちこちに、わかれています。

「なにしろ、まっすぐに学校^{がっこう}にきてもらわなければこまるんだよ」

またまたお婆さんは、ひとりごとをいって、ほうぼうへ、キャベツ・アンド・ワカメサラダとか、フライ・オブ・サンマを、おいてあるきました。

そのうちに、バケツもちょうど、からになって、お婆さんは、ウサビョン学校^{がっこう}の給食室^{きょくじつしつ}に、もどってきました。



「やれやれ、くたびれた。どっこいしょ」

といって、おばさんは、もうふにくるまって、ひとねいりです。なにしろ、もう、夜よるになっていましたからね。

さて、真夜中まよなかになると、トラマやまン山からは、大きなトラができました。目玉めだまだけでも、アヒルのたまごぐらいあります。

「はらがへったあ。ウオーウツ。なんでもくいたいのだあ」

トラはおりてきて、わかれみちのところへきて、さっき、おばさ



んのおいていったものを、みつ
けました。

「なんだ、こりゃあ。……ピーマ
ンか。じょうだんじゃない。ピー
マンなんて、はらがへつても、く
うもんかい」

あと足^{あし}で、どろをぱっとかけて、
すたすたあるきはじめました。そ
のうち、ニンジン・アンド・チク
ワソティーもみつめました。

「げぼっ。ニンジン^{ニンジン}は、みただけ
で、むねがいっぱい」

トラは、はらぺこのくせに、そ
ちちのみちへいくのをやめました。

やがて

「きやつ。ぬるつとしたぞ。こりや大だいきらいなワカメだ。やだ、やだ」

とか

「やつ、サンマは、もしかすると、ほねがのどへつつかえるな」

とかいって、おばさんがおいたものを、よけてあるいているうちに、ぴたりと、ウサビがっこうョン学校の給食室きゅうしょくしつに、ついてしまったのです。「や。ここはいい。おとといあたりの、カレーライスのおいがるよ」

トラが、鼻はなをふがふがさせながら、まどからふとい首くびをつつこんだ、そのとき、

ガツーン——。

まちかまえていたおばさんが、まるたんぼうで、頭あたまをなぐりつけたから、たまりません。



トラは、きゅつと死んでしまいました。

あくる日は、一年生のはじめての給食日です。

「おいしい、おいしい。こんなおいしいトンカツ、おかあさんもつくらないよ」

そういつて、一年生は、ひとつものこさず、たべてしまいました。一ぺんで、学校の給食がすきになりました。

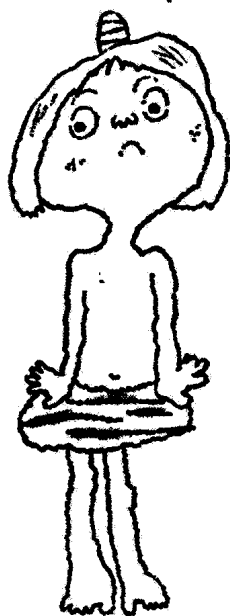
でも、それは、トンカツじゃなくて、トンカツだったのです。

そして、おばさんが、トラマン山のあっちこっちへおいてきたのは、二年生や三年生が、まえの日の給食で、たべのこしたもののばかりです。

つまり、すてるものを利用して、トラをつかまえて、みんなに、おいしいトンカツをつくったのでした。

ウサピョン学校の給食のおばさんは、こんなに頭がいいのですよ。

とらのかわのスカート



みどり町三丁目の、たかはし医院に、へんなかんじやがやってきたんだ。

目玉はぎよろぎよろ、ひろってきたようなオーバーから、す足が二本。そして、ぼろなぼうしをかぶっている。

たかはし先生は、白い紙をだして、

「名まえは」

ときくと、

「かみ——」

と、こたえた。声をきくと、子どものようなので、

「ただの、かみかい。へんな名だね」

「かみ……なり、です」

ぼうしをとると、なるほど頭には、つのが一本、オーバーをぬぐと、とらのかわのパンツだけだった。

（ぎゃっ。かみなりだ、ほんものの）